

古典ナワトル語の 擬似冠詞と擬似後置詞

彼らはいかにしてパチンコ屋を開業したか



Twitter自由言語大学 (TwifULL)
札幌言語学ミーティング 第12回
2012. 2. 14
発表者: @Mitchara

1

発表をご観くださる方へ

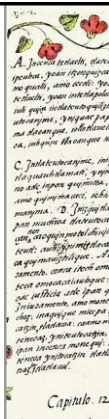
本発表の内容はアイデア段階であり、
モデル・証拠ともに不十分です。
ツツコミ・アドバイスをいただければ幸いです。



2

古典ナワトル語

- 「エキゾチック」な文法特徴
 - Polysynthetic
 - Head-marking
 - “Omnipredicative” (Launey 1994)
 - Non-configurational?
- 研究は文字資料による
 - 絵文書・年代記 etc.
 - 宣教師文法家の辞書・文法書 etc.



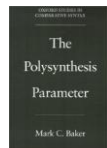
3

発表概要

- 古典ナワトル語では
 - 冠詞っぽいもの *in* → 文法化が不完全
 - 後置詞っぽいもの *-c(o)*, *-pan* etc. → 位置名詞
- 古典ナワトル語では、語の独立性が高い反面、統語的依存関係が成立しにくい？
 - Baker (1996) の MVC 仮説との関係は？
- 形式的な制約に違反せずに機能的要請を満たすために、許された要素の寄せ集めで「それっぽい要素」を発達させている（かも）

4

Theoretical preliminaries



©1996 Mark C. Baker, via openlibrary.org



5

Polysynthesis とは何か

- Sapir以来の伝統的な定義: 「**すごく synthetic**」
 - 1語が多く形態素を含み、複雑な意味を伝える
- Baker (1996) の定義: **語の完結性**
 - Morphological Visibility Condition (MVC)
「Head は同じ語内に標示された要素と同一指示の要素にしか θ -role を付与できない」
⇒ **語が項構造上完結していなければならない**
- その他、論者によって多様な定義
 - グルジア語やギリシア語を polysynthetic と呼ぶ人も

6

Baker (1996) の発想

- (典型的な) polysynthetic language には、単なる「語の長さ」以上の特殊性がある
- その特殊性とは語の完結性 (MVC) である
- この性質は parameter である --ここは今回関係ない

Bakerの仮説には、polysyn. langs. とそうでない言語との連続性を無視してしまう、polysyn. langs. の多様性を過小評価してしまう、すごいイロコイっぽい etc. いろいろ問題があり、発表者も支持しているわけではないが、理論的にはやっぱりここが出発点

7

古典ナワトル語にみるMVC

1. Ni-qu-ittac.
私、S-それ、O-見た
「私はそれを見た」
2. Ni-qu-ittac in ācalli.
私、S-それ、O-見た IN 船
「私は船を見た」
3. *N-ittac in ācalli.
私、S-見た IN 船
「私は船を見た」

8

古典ナワトル語のゆるふわ統語

- 語内の制約が厳しいかわりに、統語的自由度は高い
 - 語順は自由 (疑問詞は節頭にくる)
 - 不連続名詞句あり
 - 主語も目的語も省略できる
- “Omnipredicativity” (Launey 1994)
(動詞 vs. 名詞の区別と述語 vs. 項の区別が一致しない)
 - 名詞も動詞も常に人称一致
 - 名詞句はそのままコピュラなして述語にもなる
 - 動詞句は明示的な補文標識なしで述語の項にもなる

9

こんな説まである

- Andrews (2003) の説
 - 「古典ナワトル語では、名詞も動詞も1語で1つの節であり、多語文では節どうしが緩やかに繋がっているにすぎない」
- 4. Ø-Tlālticpac ti-nemih in ti-tlācah.
それは-地上だ 私たちは-生きる IN 私たちは-人間だ
「私たち人間は地上で生きている」

さすがにこの説を受け入れる人はあまりいませんが、Andrews の説を否定する強い経験的根拠がないのも事実

10

Baker (1996) による多語文の解釈

- Jelinek (1984) のワルビリ語の分析を継承:
「Polysyn. lang. の諸特性は、項名詞句を全て adjunct と考えることで説明できる」
 - 語順の自由度の高さ
 - True quantifier の不在
 - True determiner の不在
 - Reflexive pronoun の不在 etc.

11

発表概要 (再)

- 古典ナワトル語では
 - 冠詞っぽいもの in → 文法化が不完全
 - 後置詞っぽいもの -c(o), -pan etc. → 位置名詞
- 古典ナワトル語では、語の独立性が高い反面、統語的依存関係が成立しにくい?
 - Baker (1996) の MVC 仮説との関係は?
- 形式的な制約に違反せずに機能的要請を満たすために、許された要素の寄せ集めで「それっぽい要素」を発達させている (かも)

12

擬似冠詞の *in*



13

「擬似冠詞」*in*

- 主に名詞の前に現れる不変化の **particle**
- テキストに死ぬほど出てくる
- 伝統文法では「冠詞」扱われることが多い
- 名詞の定・不定にかかわらず現れ、あってもなくても文の意味はあまり変わらないとされる

5. *Quinamaca* *cacahuatl*.

6. *Quinamaca in cacahuatl*.

彼はそれを売る *IN* カカオ豆
「彼はカカオ豆を売っている」

14

In の冠詞っぽい特徴

- 語順が固定
- 単独で文をなさない
- おそらく文法化した指示詞起源 (cf. *in* 「これ」)
- 文の述語には現れない (cf. アラビア語の定冠詞)
- **Definite** の名詞に現れやすい

15

In の冠詞っぽくない特徴

- 名詞以外の前にも現れる (補文標識 etc.)
7. *in mahāltiah cihuah*
IN 彼女たちは水浴びをしている 女たち
「水浴びをしている女たち」
8. *in tlazohtilmahtli in mahuiztic*
IN 高級マント *IN* すばらしい
「すばらしい高級マント」
- 義務的でない (あってもなくてもよい)
 - **Definiteness** と直接対応はしない

→ Himmelmann (2001) その他の類型論的基準に照らしても、どうも冠詞とはいにくいような気がする

16

In の理論的解釈

- *In* を冠詞と考えにくい理論的理由
 - Baker (1996) では、*polysyn. lang.* は真の **determiner** をもたず、**definiteness** を義務的に表示できない (名詞が代名詞的要素を含むので)
 - Andrews (2003) の説では、名詞は主語部と述語部を含む節なので、述語部にあたる語幹だけを限定することはできないはず

17

In の性質まとめ

- ① たしかに見た感じ冠詞っぽいけど
- ② よく見ると形式上は冠詞とまではいえないし
- ③ 冠詞と考えると辻褃合わせがめんどくさい
 - 文法化前の指示詞の文脈指示的な機能だけは一部残しており、「談話マーカー」くらいが妥当な位置づけという気もするが、やはり微妙
 - ちなみに、こういう指示詞由来の冠詞っぽい謎の機能要素は同じ *polysyn. lang.* のモホーク語にもあるらしい (Mithun)

18

擬似後置詞 -c(o), -pan, etc.



19

「擬似後置詞」-c(o) etc.

- “Relational noun” と呼ばれ、メソアメリカ先住民語ではわりとおなじみの要素
- ようするに文法化した位置名詞みたいなもの
- 名詞語幹に後続するもの、所有者接辞をとるもの、その両方に使えるものがある
 - 名詞 *nacaz-tli*「鼻」→ *nacaz-co*「鼻に」
 - 名詞 *cal-li*「家」→ *cal-pan*「家に」
 - 三人称単数所有者接辞 *i-* → *i-pan*「彼に・それに」
- 地名 Mexico・Acapulco の -co (もとは locative)

20

-c(o) etc. の 後置詞 (または斜格) っぽい特徴

- 単独では名詞として使えない (ものが多い)
- 名詞修飾語にも動詞修飾語にもなる
- 9. *tlāl-t-icpa-c tlācah*
地上-CO 人々
「地上の人々」
- 10. *tlāl-t-icpa-c tinemih*
地上-CO 私たちは生きる
「私たちは地上で生きる」
- 移動動詞の項になる
- 名詞を spatial な付加詞として使うには必須

21

-c(o) etc. の 後置詞 (または斜格) っぽくない特徴

- 目的語人称接辞ではなく所有者人称接辞をとる
- 述定文の主語・述語にもなる (名詞と類似)
- 「...へ」「...から」のように方向や経路を表す要素は含まれず、単に「場所であること」を表示するのみ
- 対応する thing-nominal をもつことがある
- たまに thing-nominal と混用される

→ 位置名詞から後置詞への文法化が進みきっていない

22

-c(o), -pan etc. の性質まとめ

- ① たしかに機能的には後置詞っぽいけど
- ② 形式上はやっぱり位置名詞のまま

23

擬似冠詞・擬似後置詞のまとめ

- ① 機能的には冠詞／後置詞っぽい
- ② 形式上はもとの要素 (談話マーカー／位置名詞) の特徴をほぼ完全に残している

24

ここでまさかの深読み

- 古典ナワトル語で *in* や擬似後置詞のような中途半端な要素が発達しているのはなぜか？
- 古典ナワトル語には、冠詞・前後置詞が存在しにくいような制約が働いている？

25

冠詞・前後置詞が発達できない理由を考えてみた



26

冠詞が存在しない理由（仮説）(1)

古典ナワトル語の名詞は常に述定構造を含み、項でも名詞述語でも人称一致(赤が主語部、青が述語部)

- **Andrews (2003)** の分析: 人称接辞は代名詞
 11. [t-oquich-tli] 「おまえは男だ」
 12. [Ø-oquich-tli] 「彼は男だ」
- **Baker (1996)** を応用した分析: 人称接辞は一致要素
 13. [pro t-oquich-tli] 「おまえは男だ」
 14. [pro Ø-oquich-tli] 「彼は男だ」
- いずれにせよ、語内の要素またはそれに coindex された要素が R-argument (述定構造の主語) を表す代名詞的要素を含む: **Andrews** では人称接辞、**Baker** では *pro*

27

冠詞が存在しない理由（仮説）(2)

もし古典ナワトル語に定冠詞があったら、定冠詞は主語部と述語部の両方を限定してしまう

15. *THE + [t- -oquich- -tli]
 定冠詞 **主語** **述語** **主語**

16. *The [you are a man]

※ 説明を簡便にするため Andrews (2003) の分析を仮に採用

このため、冠詞は発達したくてもできないのでは？

28

前後置詞が存在しない理由（仮説）

- 古典ナワトル語では、文として独立できない **lexical category** はいらない子なのは
 - 古典ナワトル語は **head-marking** であり、名詞に明示的な形態格がない(ほかの語に依存する形式がない)
 - 古典ナワトル語では、名詞・動詞は原則としてすべて文として独立できる(名詞は述定文、動詞は動詞文として)
 - 文として独立できない要素は、**particle** (*in, ye, oc, zan, ca, mā, nō* etc.) と一部の副詞 (*cencah* etc.) のみ

29

形式的制約の抜け穴？

- **Determiner** は **NG**
 でも冠詞っぽいものが使いたい！
 → 「**Determiner** ではなく**談話マーカ**ーです！」(キリッ)
 → 「**談話マーカ**ーなら仕方ないな！」
- 斜格的要素は **NG**
 でも前後置詞っぽいものが使いたい！
 → 「**形式的には後置詞**ではなく**位置名詞**です！」(キリッ)
 → 「**位置名詞**なら仕方ないな！」

30

つまりこういうことではなかろうか

- 賭博は禁止（形式的制約）
でもギャンブルで遊びたい！（機能的要請）
→「お金を賭けてるのではなく、渡すのは「景品」です！
景品交換所は別店舗！」（キリツ）
→「景品なら仕方ないな！」
（制約に違反せず機能的要請を充足）
- このスライドはフィクションです。実在の業種、業界、企業とは一切関係ありません。

31

一般論：形式と機能

- 自然言語の形式的側面と機能的側面
- 文法の「プリコラージュ」
 - 機能的目的だけに沿って形式が発達するわけではない
（自然言語は代用、抜け道、次善策だらけ）
 - でも、異なる制約下に発達した要素であっても、結果的に生まれるパターンは時によく似ている（魚とイルカ？）

32

じゃあ、この場合の
「形式的制約」って何？



33

前後置詞を禁止する制約？

- 冠詞の不可能性は Baker の仮説でも予測できるけど、後置詞の不可能性はどこから？
- 一部の polysyn. langs. では特に斜格的要素が禁止されているようにも見えない
 - ナバホ語: =deé, =dóó, =góó etc.
 - アイヌ語: =ta, =un, =wa etc.
- でも、クレー語やイロコイ諸語など、ナワトル語と似た性質をもつ polysyn. langs. もある模様
- どうも Baker の MVC (だけ) ではダメな気がする

34

もうひとつのMVC？ (1)

- 統語関係って依存（よりかかり）関係だよな



35

もうひとつのMVC？ (2)

- 日本語・英語・スペイン語型の言語



- 古典ナワトル語型の言語



36

もうひとつのMVC? (3)

- MVC (またはそれに類する制約): 「Head が充足していなければならない」
- 未知の head-marking 制約: 「名詞や動詞は依存専用の形式を持たない」(?)



- こういう制約は実在するだろうか？
イロコイやアルゴンキンに照らしての妥当性は？

37

最大の問題点

- 現代ナワトル語 (のいくつかの方言)
 - スペイン語の前置詞 *de, desde, para* などの借用により、前置詞が豊かに (Suárez 1977)
 - その影響もあつてか、所有者人称接辞 + 擬似後置詞由来の *pan, huan* などの固有語語源の前置詞も発達
 - しかし、こうした現代ナワトル語諸方言の多くは依然として polysynthetic な要素を強く残しており、文法の全体像はそんなに変わっていない

→ 「未知の head-marking 制約」があるとしても、そんなに強い制約ではない

38

その他の課題

- 「制約がある」↔「傾向がある」の循環論
- 類型論的裏づけをとる必要あり
- 機能上の「冠詞っぽさ」「前置詞っぽさ」なんて、英語やスペイン語の色眼鏡が生んだ “translation mirage” じゃないの？
- 形式的制約？単なる類型論的傾向じゃないの？
- もし「未知の制約」が存在するとしたら、Baker の MVC (的制約) との関係は？
- 「ほかの語に依存」をどう定義するか？

39

それでもこの方向性にこだわるのは

- 古典ナワトル語は:
 - 統語的制約が異様に緩い
 - ほかの音声言語について知られているような文法的な標示手段 (語順、形態格、名詞クラス、etc.) に乏しい
 - これらをどうやって補っているのかまったく不明
(古典ナワトル語を習い始めた頃からの正直な感想でもあります...)
- Baker (1996) を批判的に検討したいな
- そもそも head-marking ってなんだろう？

40

結局ここに行き着く

「Head-marking ってのはさ、やっぱり
どっか不便なんじゃないのかな」

(先住民語学者の某先生、飲み会の席でのお言葉)

41

ご静聴ありがとうございました。
ツツコミお願いします！



42

リファレンス

- Andrews, J. Richard. 2003. *Introduction to Classical Nahuatl: Revised Edition*. Norman: Oklahoma University Press.
- Baker, Mark C. 1996. *The Polysynthesis Parameter*. New York, Oxford: Oxford University Press.
- Jelinek, Eloise. 1984. Empty categories, case, and configurationality. *Natural Language and Linguistic Theory* 2: 39-76.
- Himmelman, Nikolas P. 2001. Articles. In M. Haspelmath et al. eds., *Language Typology and Language Universals: An International Handbook*, Berlin: Mouton de Gruyter, vol. 1, 830-841.
- Launey, Michel. 1994. *Une grammaire omniprédicative: essai sur la morphosyntaxe du nahuatl classique*. Paris: CNRS Édition.
- Suárez, Jorge A. 1977. La influencia del español en la estructura gramática del náhuatl. *Anuario de letras* 15: 115-164.

